

◆ 敷地内の施設配置の比較

新校舎等の整備位置	パターン① 敷地南側	パターン② 敷地南側＋東側または西側	パターン③ 敷地北側（仮施設整備あり）
新校舎等の供用開始時期	令和12年度	令和12年度（南側）、令和15年度（東側または西側）	令和10年度（仮施設）、令和14年度（新校舎）
整備範囲	約3,800㎡	約5,400㎡（＝南側3,800㎡＋東側1,600㎡） 約5,000㎡（＝南側3,800㎡＋西側1,200㎡）	約5,900㎡
高さ制限	日影規制のため建物東側を低層にする必要あり	日影規制のため建物東側を低層にする必要あり	日影規制のため建物東側を低層にする必要あり
必要諸室の配置	十分な広さの校庭を確保した上で、複合施設を含め、1～4階での望ましい教室等の配置が難しい	十分な広さの校庭を確保した上で、複合施設を含め、ゆとりを持たせつつ、1～4階での望ましい教室等の配置が可能	十分な広さの校庭を確保した上で、複合施設を含め、ゆとりを持たせつつ、1～4階での望ましい教室等の配置が可能
動線計画	複合施設を含め、動線計画が構築しやすく、施設の安全性や利便性が高まる	建物が分かれることでセキュリティに配慮した動線計画が構築しやすい部分もあるが、学校部分が点在化するため、シンプルな構造の校舎とならず、学習活動等における利便性の低下が懸念される	複合施設を含め、動線計画が構築しやすく、施設の安全性や利便性が高まる
外構整備	正門の位置が敷地南側に変更されるが、鎌倉街道の交通量が多く、登下校時の安全性が懸念される ※建物のセットバック及び歩行空間を確保することにより対応可能 駐車場等の整備スペースを十分に確保することができる	・正門の位置が敷地南側に変更されるが、鎌倉街道の交通量が多く、登下校時の安全性が懸念される ※建物のセットバック及び歩行空間を確保することにより対応可能 ・駐輪場や駐車場のほか、保育園の園庭などを整備するスペースが十分に確保できない ※地下や屋上を活用することにより対応可能	正門の位置に変化なく、駐車場等の整備スペースも十分に確保することができる
校庭の日当たり	午前中は校舎の陰になる ※雨水対策等の物理特性を踏まえた舗装により対応可能	午前中は校舎の陰になる（東側） 午前・午後ともに校舎の陰になる（西側） ※雨水対策等の物理特性を踏まえた舗装により対応可能	午前・午後ともに校舎の陰とならない
校庭の使用制限	約4年 ※けやき小など周辺施設の代替利用により対応可能	約6年 ※けやき小など周辺施設の代替利用により対応可能	約6年 ※けやき小など周辺施設の代替利用により対応可能
体育館・プールの使用制限	—	—	整備手順等により発生する可能性あり（最大約5年） ※けやき小など周辺施設の代替利用により対応可能
近隣への影響	校庭及び夜間照明の位置変更に伴う騒音、砂埃や光害 ※防音ネットの設置、舗装や植栽の工夫、光害対策機器の導入、照射範囲や利用時間の最適化により対応可能	校庭及び夜間照明の位置変更に伴う騒音、砂埃や光害 ※防音ネットの設置、舗装や植栽の工夫、光害対策機器の導入、照射範囲や利用時間の最適化により対応可能	現在も騒音等による近隣への影響が発生しているが、建替え後の影響範囲は変化なし
避難所機能	校庭に接している道路の幅員が狭く、災害時等における緊急車両の校庭へのアクセス性が懸念される ※地区計画に伴う道路拡幅を検討	校庭に接している道路の幅員が狭く、災害時等における緊急車両の校庭へのアクセス性が懸念される ※地区計画に伴う道路拡幅を検討	現況から変化なし
整備費用の増加要因	・歩行空間の整備 ・雨水対策等の物理特性を踏まえた舗装	・工事期間の長期化 ・歩行空間の整備 ・地下や屋上における駐輪場等の整備 ・雨水対策等の物理特性を踏まえた舗装	・仮施設整備（約25～30億と試算）